

烏森トレッキング回想記

第十七回

日 時：5 / 1 2 (土) ~ / 1 3 (日)

概略行程：

1 日目 白丸駅～数馬の切り通し～数馬峡橋～白丸ダム／魚道～鳩ノ巣小橋～鳩ノ巣バンガロー／昼食～鳩ノ巣駅～御岳駅～滝本～御岳平～ 宿泊／登奈利荘

2 日目 ～長尾平～御岳平～滝本～御岳～御岳ドライブイン／昼食～御岳駅

メンバー：米本、山田、吉川、小林、磯崎～

秋を見送り、新緑の奥多摩を訪問。

会頭は別の所用から、大谷氏は海外ボランティア中から、それぞれ欠席。出席を予定していた森氏も、直前の仕事トラブルにより急遽不参加を余儀なくされる。

また、体調調整中の小林氏は、無理を押して、途中からの参加となる。

初日は、予報通りの清々しい快晴。

待ち合わせの青梅線／白丸駅に一番乗りして、駅のホームが見下ろせる坂上道端に腰掛け、持参のコーヒーを飲みながら、メンバーの到着を待つ。

坂の直ぐ上、左手民家の庭には春の花が、今が盛りとばかりに咲き乱れ、樹々は目に鮮やかな新緑の輝き。とりわけ見事なのは、碧空背景に、一枚一枚が大振りて朱色を塗り立てたばかりの様な薄葉の輝き。(後着した山田氏から、柿の新葉と知らされる)

例によって、イヤ・ホーンからは始まったばかりの“悠々土曜ワイド、「永六輔・その新世界」”が鳴り響く。

先ず姿を現したのは、久し振りの参加となる吉川氏。

例によって、コンパクトにまとめたザックを背負いホームを悠々闊歩。坂上から声を掛けて、驚かす。

次に到着したのは、最も、遠距離地からの参加と思われる山田氏。

切符の回収箱を探す風は案内状の文意が伝わらずか、それとも本意になかったためか、いずれにしても堂々闊歩。

(話を聞くと、両名は同じホリデー快速に乗車し、山田氏が青梅で各停に乗り換えたのに対し、吉川氏は終点奥多摩迄行き、一駅引き返した由。この選択、両者共に間違いはなし)

最後は想定通りの電車(10:09着)で到着した米本氏。

自宅から4時間も掛かった由で、その原因は、川崎駅での南部線乗換を見送ってしまい、東京経由になってしまったためと云うが、**見送った理由については口をもごもご、明確には語らず。**

揃ったメンバーに森氏の急な欠席と、小林氏が昼食地ノ鳩ノ巣ガーデンで合流する旨を伝え、最初の訪問地、「数馬の切り通し」へと急坂の続きを上る。

久し振りの再会に、息を継ぎながらの、互いの近況話に花が咲くが、舗装路を外れ、「溪山窯」前の土道を抜けて静かな山中に入る頃には、絵の具を塗りばめた様な新緑を愛でたり、樹間に洩れる陽光に喜んだり、すっかりハイキングモード一色。

駅から約10分で「数馬の切り通し」に到着。

鳩ノ巣から氷川（奥多摩）に抜ける道を確保するため、大岩をツルハシとゲンノウで切り開いたもので、幅は約1m、奥行き約2m、高さ約3m程度の切り通し。

江戸中期迄主要道として利用されたようだが、現在は途中で行き止まりとなり、代わって下方多摩川沿いに青梅街道が走り、岩盤部は白丸トンネルで抜ける。

薄暗い林間から眺める「切り通し」の向こうには、一転、広葉樹の森が拡がり、陽光が新緑を明るく照らす。これを見たメンバーはご自慢の高級デジカメをおもむるに取り出して、カシャッ、カシャッと初操作。

と同時に、吉川氏の携帯電話が鳴り響き、青梅駅に着いた小林氏から待ち合わせ時間の確認電話。

静寂の山中で、エレクトロニクス技術の凄まじさを実感させられる。

道を戻り、途中の木階段を下って、山小屋風に造作された、手作り味噌の「四季の家」裏手を抜け、更に、青梅街道を渡って数馬峡橋へと一挙に歩き、橋の袂に立てられた川合玉堂、田山花袋、山田早苗の歌碑を案内し、しばし佇む。

いつも思うが、余りの達筆に折角の奥多摩賛歌も判読出来ず。未熟者と片付けるには何とも勿体なく、何か工夫はないものであろうか？

多摩川ノ鳩ノ巣溪谷橋上へとメンバーを誘う。

眼前には、両岸から斑模様の新緑が萌え広がり、眼下の濃紺、明鏡止水の川面を包むように春絶景、メンバーからは思わず溜息が洩れる。

無粋と叱責されても、一言云わねば。

渓流が滞留している不思議さを指摘し、その理由は下流直ぐ先に、「白丸ダム」があり、眼下に拡がる水面は云わば「白丸湖」と説明するや、**アレレッ、帽子が、帽子が風で...!**

宙を舞い舞い、風留め付き布地丸帽が、遙か下方の川面に向かって浮遊しながら降下。

「白丸湖」でカヌーを漕ぐ若者が数組居り、彼らに拾ってもらってはと勧める人もいるが、さほど未練ある物でもなく、代わりに、首に巻いたタオルを頭に被って、きりりと結ぶ。

橋を渡って右岸沿いに、「鳩ノ巣溪谷遊歩道」を歩く予定であったが、過日の崩落事故で、現在、通行禁止中、(事前訪問で承知済み)メンバーに事情を伝えて、左岸側、青梅街道を歩くと宣言し、数馬峡橋を後にする。

【余談49】奥多摩トレッキングのベースは「多摩川」を巡るトレースでもある。

多摩川は雲取山の南西、埼玉、山梨両県にまたがる「笠取山 1,953m」を源流とし、奥多摩湖、氷川、鳩ノ巣、御岳の各溪谷を経、途中、秋川とも合流し、羽村取水堰、府中、調布を抜け、東京湾迄の滔々たる流れ。

烏森トレッキングでは奥多摩湖、むかしみち、氷川キャンプ場、鳩ノ巣溪谷、御岳溪谷、秋川溪谷、秋川橋河川公園等で触れ合っている。

なお、右岸、左岸の呼称は川上から見て決められる。

この辺り、青梅街道とは云え、道幅狭小、車輛、オートバイ、サイクリング車、ハイカーが行き交うが、向かい先は奥多摩氷川方面に集中し、我々とは逆方向、さながら、朝の通勤ラッシュ時に下り電車に乗るような雰囲気、誠に複雑な風景。

それでも、白いガードの右側、多摩川左岸沿いを縦一列に並んで歩き、途中、山田氏から岸辺に繁茂する樹々種の説明を受け、時折、川向こうに見え隠れする溪谷遊歩道を遠差しして、“本来はあの道を歩く予定であったのに...”と、弁明を繰り返す。

約20分で、街道から少し外れた川沿いの広場に到着。

駐車場とトイレが設けられ、その奥には白丸魚道管理棟が建ち、更に、右手の階段を下ると白丸のダム堤。

まずは魚道の見学と、フェンス扉がオープンされた小さな建物施設に入場し、ループ状の鉄階段を下って、水路を敷く地階フロアーに降り立つ。

【余談50】魚道は文字通り、魚のための道で、遡上時、堰堤、ダム等の大障害を乗り越えるための専用水路である。

魚道そのものは多摩川下流、「二ヶ領宿河原堰堤」等で承知しており、水量次第ではあるが、晴天下、遡上する魚が必死に飛び跳ねる様を觀て感心している。

ただ、それらの施設は堰堤と一体で造られており、案内に気付かぬ人も多々居ると思われるが、それに対し白丸魚道は後工事のためか、ダム堤を迂回する大掛かりなもので、施

設内部の関心から、前々から一度訪ねて見たかった建物である。

しかし、立ち寄る時間が早朝と云うこともあり、いつも閉館され、閉館日、閉館時間の案内もなされておらず、これまで見学する機会がなかったが、今回は奥多摩町観光産業課に架電し、当日の営業と11:00からの閉館を知り、やっと訪問が実現した。

「白丸魚道」は平成12年完工で、ダム堤の下流側手前左岸をジグザグにコンクリートスロープで上り、ダム脇を迂回して白丸湖に繋がる。

水路幅は2m弱、遡上する魚の休憩ゾーンとして、ここでも中央部にコンクリート壁を立てている。

しかし、魚生息環境のためか、水路の周辺は何とも薄暗く、慣れた眼にも数匹の小さな魚影を認めるのが精一杯、若干の期待外れに、“大層な施設なこと”と、つい愚痴を漏らす。

白丸湖への水路出口を確認し、ダム堤へと鉄梯子下る。

上流側眼前にはゴミの滞留した湖面が漂い、下流側遙か下方には岩の渓谷と魚道入口コンクリートスロープを遠望、ここでもパチリ、パチリとカメラの連射音。

堤を渡って、ここで遊歩道と合流。

右手、数馬峡橋方面への道はロープ閉鎖され、左手、下流沿いの右岸道にシフトし、やっと鳩ノ巣渓谷遊歩道に入る。

間無く、木テーブルを設置する休憩所に到着、早くも小休止。

湯沸かしを求める声もあるが、鳩ノ巣ガーデンは近く、小林氏もそろそろ到着する時刻と説明し、早々に出発。

渓谷岩場への急な石段を下る途中、後詰めの山田氏から厳しいレクチャーひとつ。

“正面を見据え、背筋を立てて、そのまま前に脚を運ぶ吉川氏の石段下りは教科書通りの百点満点、それに引き換え、横を向いて、石段と平行に脚を降ろす先頭の御仁は危険極まりない駄目な歩きの典型例”と！

とは仰いますが、私も、もう若くはありません。腰と膝にはサポーター、足を踏み外してしまうと、最早、ヒラリと着地する自信はありません。...こんな急階段怖いですよ！

鉄柵でガードされた岩場に、全員、無事降り立つ。

渓谷上流を見上げ、さきほど見下ろしたばかりの魚道スロープを仰ぐ。

すっかり透明色に戻った溪流が岩だらけの渓谷を縫う様に流れ落ち、待ち受ける大岩に激突して飛沫を上げたり、淵に流れ込んで渦を巻いたり白色混濁模様。

遊歩道と云うには、若干、荒れてはいるが、途中、溪流釣りを楽しむ人の魚籠を探したり、鳩ノ巣から上って来るアベックとエールを交わしたりし、岩場続きの道を慎重に下る。前方上部に「鳩ノ巣小橋」が現れ、鳩ノ巣に到着したことをメンバーに告げる。

橋を渡ると陶磁器店を併営する小さな喫茶店や画廊、更には、食事ができて売店も置く宿屋が並び、この辺りは鳩ノ巣の行楽ゾーン。

神社を祭った小山下に立て掛けられた案内板が、江戸大火の後、家屋再建用の木材集積地となり、その飯場に鳩が巣作りしたことから現在の地名になったと説明する。

急坂を一旦青梅街道まで上り、橋の脇から、「鳩ノ巣ガーデンキャンプ場」への急坂を下り直し、管理人小屋の前で小林氏と合流。

昨秋と同じ、一番奥の屋根付き調理場を選び、木テーブル、木ベンチに荷を降ろす。**無論、直ぐにギタンパッコンする不安定さは承知しており、慎重にバランスを図る。**

奥のテーブルでは、先着女性陣がパーベキューを調理中。いやはや姦しいこと！

ザックを開いて、秘匿していた本日のメニューを披露。

木テーブル上に、「蕎麦束」、「海苔」、「薬味（葱、生姜）」、「めんつゆ」、「ゴマ」、「トマト」を並べ、ずばり、昼のメニューは手軽であっさり、「ざる蕎麦」で一本勝負！

早速、各自段取りに掛かり、吉川氏は竈の火熾しを、山田氏他は調理器具、水の手配に、幹事は「トマト」の冷やしに走る。

想定外は缶ビールの購入に管理人小屋に向かった某氏の疾走。

折角前回、“うちのビールは法外だからねえー、飲むんなら、来る途中で買って来た方がいいよ！”と、女将から貴重なアドバイスを受けていたにもかかわらず...、買うなら買うで、ひと登りして青梅街道沿いの店まで行って...、そんな元気がある訳ないか！

麺を茹でるだけとは云え、メンバーの中には様式美を大事にする御仁や、空きっ腹にアルコールが効いた御仁も居り、例によって擦った揉んだで調理が進行。

それでも箆に盛られた蕎麦が中央に据えられ、各自の手元につゆ小鉢（コーヒー・カップ、プラスチック製メンバーズ・カップ、魔法瓶のキャップ他）が整うと準備は完了、“いただきます”の声が出揃う前に、割り箸、個人箸が入り乱れ、旨い旨いと一挙に平らげられ、本音かどうか、味量共に完璧であったと自讃し合う。

食後のデザートに溪流で冷やしたトマトを嚙りながら、昼食代を精算。

「氷川」、「秋川橋」、「十里木」と炊さんの回を重ねたが、何と云っても、ここでの自炊が最も割安とメンバーの意見が一致し、爪楊枝を加える。

風薫る5月の午後、新緑に包まれ、水豊かな多摩川鳩ノ巣渓谷河辺で、しばし休息する。

視線の正面先には「雲仙橋」が溪谷断崖間を繋ぎ、その背に広がる青空は、早、夏の色。

御岳に移動し、ケーブルで山上へ。

いつもの大塚山分岐への道は取らず、表参道を直進して、早々に本日の宿 / 登奈利荘に入場。

“お久しぶりです”と、女将に三つ指ついて迎えられ、いつもの階上右手の部屋に荷を降ろす。勝手を知った定宿に、手順通りに硝子戸を全開して緑の風を取り込み、テレビを付けて天気予報を睨んだり衣服をベランダに干したりして、最後は御岳山の銘菓、「山の呼び声」をお茶請けに、緑茶を飲んで先ずは一服。

初めての小林氏は別として、メンバーの荷を置く場所が毎回同じゾーンであることに気付き、つい苦笑い。

まだまだ明るい山上の夕、宴迄の時間をテレビで大相撲を見たり、ザックを整理したり、風呂に入ったりと各自各様に過ごす。

宴は、いつもの1階大広間。

馳走を前に、楽しい宴の始まりは、いつものようにビールで乾杯！

改めて挨拶する女将と旧交を暖め、例の旅番組出演をからかうと、“お互い様ですから”とさりとかわし、それ以上は取り合わず。

おやっ、変ですよ？

ビールが、料理が、旨くないんです！

どうしたんでしょう？ あれっ、まあ！？

...皆様、誠に申し訳ありませんが、失礼して、一寸、休ませていただきます。

退席し部屋に戻ると、ちょうど息子が寢床を述べている最中で、片隅の布団に潜り込んでボタンキュー。

微かな人声に眼を覚まし、二次会と気付き勇躍加わるも、直ぐにダウンして、再び寢床に戻り、静かに(?)眠る。

翌朝も晴れ。

いつものように、米本氏は早朝の「日の出山」に登り、山田氏は朝風呂で汗を流しと相変わらず気力、体力十二分のご両人。

何とか体調も回復に向かい、少量ながら、朝食も摂る。

未定であった本日の行程を相談すると、例によって「そうせい侯」、**具体的、積極的な意見は出ずで**、取りあえず長尾平に向かうことにする。

大事を取って先に下山する小林氏と宿の前で別れ、急坂の表参道を御獄神社へと歩く。

広葉樹の林 / 長尾平は、何とも爽やかな初夏の候、生い茂る青葉に包まれ、五月の風が樹間を渡る。

先端の展望台迄歩き、四阿屋石垣下の平地、いつもの中程木テーブルに荷を降ろし、お湯も沸かさず、山上の朝をゆったりと堪能する。(いや沸かしたかな? 何しろ、あれ以降の記憶はおぼろで...)

メンバーには懐かしい'70代のテープ音楽を流すも、何故か音に雑音が混じり今一つ、体調の悪さを示すかごとくで、早々にスイッチをオフ。

南西に霞む「日の出山」山頂に人影を探して見たり、昔の思い出に話を咲かせて、しばし談笑。

話の区切りに、強さを増す陽射に木陰を求めて樹下(以前、漆の木が生えていた辺り)に移動し、草むらに寝転ぶや、いつの間にやら、またスヤスヤと眠る。

暑気と虫の羽音に眼を覚まして周囲を見回すと、全員木テーブルを離れて思い思いの場所で休息中。

再び木テーブルに集まり、何の合図もなく、早、下山の荷造りを始め、参道を戻って御岳平からケーブルで下山、滝本からバスで御岳駅へ。

昼食をとるメンバーの求めに、始めて、京王電鉄経営の、駅前、「御岳ドライブイン」2階に入場し、御岳溪谷が一望できる窓際に座る。

何とも驚いたのは、メンバーが頼んだメニューは全員「ざる蕎麦」。

その後、米本、山田両氏が「カツカレー」にオーダー変更したものの、次回以降の参考にと手帳にメモして、一人冷水を飲む。

駅前バス停で、これから御岳山に向かう人の並びを見、若干、早過ぎるかなと惜別しながら、御岳駅への石段を上る。

(後日、原因が風邪引きであったことが判明。メンバーに改めて詫び、次回からの体調管理を誓う)